

なまず

那珂川町郷土史研究会

探訪 81

裂田溝8

なまずのかまど・一の井堰周辺

を出したらよいかを見極めるため、脊振山に上られるとき、この瀬を馬で渡られたのでこの名がついたとも言われています。かつて、この瀬の下流に「馬の瀬」と呼ばれた鞍の形をした大岩がありました。昭和7年ごろ石材にするため壊されてしまいました。瀬の中ほどにも鞍の形をした石があり、地元の人は今ではこの石を「馬の瀬石」と呼んでいます。また、この瀬に大岩が二つ並んでいます。

「皇后の命で、一の井堰を築くとき、大石が川上から次から次に流れてきて、完成まじかな井堰工事のじゃまになりました。そのとき皇后が石を止めるよう神々に祈ると、川底にあった二つの岩がたちまち起き上がり、流れてくる石をひとつ残らず止めてしまいました。この二つの岩は山潮石（兄弟石）と言われています。以前「ある石工がこの岩から石材を採ろうとして、ひとつの岩にノミを入れたところ、病気になる中止した」と言われて

伏見神社前にある一の井堰は、江戸時代（1603〜1868）筑前国最大といわれた井堰で、ここには神功皇后にまつわる多くの伝承が残っています。

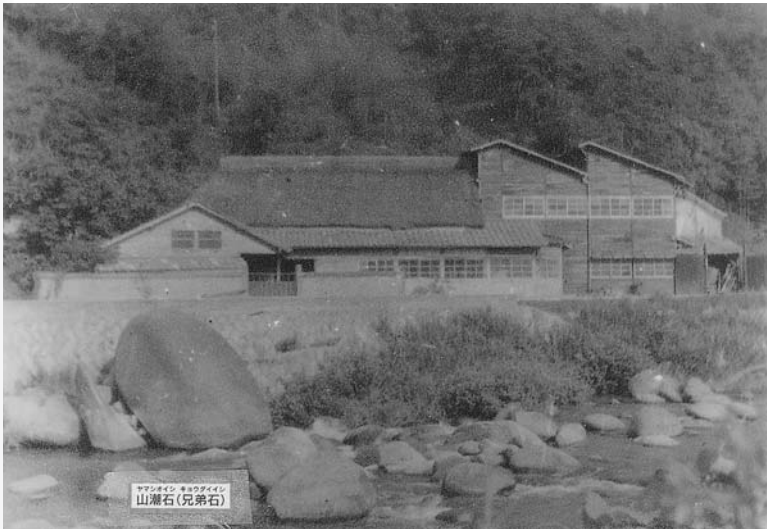
一の井堰の川上に「馬の瀬」といわれる大小の岩が点在した瀬があります。古老の話によれば「神功皇后が三韓遠征の際、どこから軍船

いて、今でもノミ跡が残っています。山潮石の下流から一の井堰との間に伏見瀧・鏡瀧・風早瀧という三つの深い瀧がありました。この三瀧は「なまずのかまど」と言われ、たくさんなまずのすみかとなっていました。以前は道路から瀧まで7mくらいの切り立った崖になっていましたが、昭和6年（1931）の道路拡幅工事でなまず瀧は埋められ、新道（現385号）が開通しました。なまずは神功皇后のお使いの魚とされているため、捕る人もなく、食べることもありません。このことは、地元では現在も守られ語り継がれています。山田のなまずは皇后のお使いというだけでなく、不思議な生態を示し、天変地異が起こりそうになると、かまどから出てきて異常な行動をとったと伝えられています。伏見神社の先代宮司である（故）酒井吉臣氏は、太平洋戦争終結前の昭和20年（1945）8月3日から10日までの午前4時ごろ、ひどく混乱した状態のなまずを目撃されたそうです。

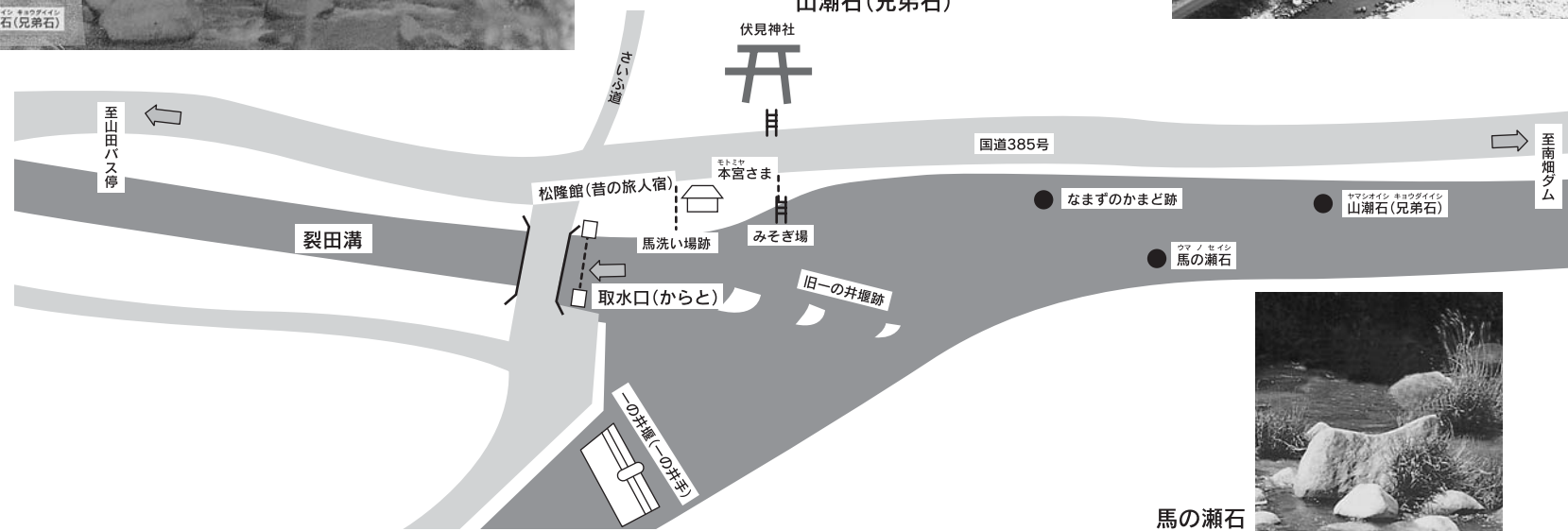
夏には一の井堰からなまず瀧にかけては、子どもたちの格好の泳ぎ場でした。「なまずのかまど」の奥

は牛頸に通じているので奥深く入ってはならぬ」と親から言われ恐れられていました。古来から多くの住民に水の恩恵を与えてくれた一の井堰も、永年の水害などによる老朽化で、昭和62年（1987）新しく近代工法により「転倒式一の井堰」として生まれ変わりました。毎年4月には山田区全域で裂田溝の清掃が行われ、1年間溜まった水門（裂田溝取水口）付近のヘドロやゴミが取り除かれると、いよいよ田植えの準備が始まります。次号は、裂田溝の取水口付近を紹介します。

後方の建物は、江戸時代から続いた川原水車屋です。黒田藩の御殿女中が用いた顔洗い粉が作られていました。大正12年には、水カタービンが取り付けられ、昭和35年頃まで製麵工場でした。現在は取り壊されありません。



改築前の一の井堰（昭和62年）



馬の瀬石



裂田溝水門前の清掃